

各器種の方法についても概ね共通した方法がとられているようである。

県内の他の窯跡の窯詰め方法については未確認のため、比較をとおしての位置づけは別の機会に行いたい。

5. 6世紀後半から7世紀前半の須恵器生産の素描

関東地方では、群馬県域を中心に5世紀からの在地の須恵器生産が知られているが、その様相は未だ充分に明らかでない。本書で報告した末野窯の須恵器についても本来ならば前述したように土師器との関係において、また関東地方の須恵器全体の中で考えていく必要があるが、筆者に現在その用意はない。ここでは2で得られた知見をもとに、埼玉県内の窯跡出土資料の内、坏・高坏・小型短頸壺・甕を用いて6世紀後半から7世紀前半の須恵器生産について若干整理を行うことにしたい。

埼玉県内には、羽尾、平谷（藤原1982）舞台（谷井1974・井上1978）、根平、西谷ツ、小用（高橋1977）といった6世紀後半から7世紀前半の須恵器窯跡が知られている。この内、平谷は瓦陶兼業窯、その他は須恵器専業窯である。また、舞台窯では調査された窯跡とは別に、第1号住居跡、第5号住居跡で須恵器がまわって出土しており、これも調査区外の窯跡産と考えられているため、その資料も含めて検討したい。小用窯については、資料が少量で短頸壺のみしか明らかでないため、比較を行い難く、対象から除外したい。

（1）各器種の様相

坏蓋 法量は、口径14～16cmの大型の一群（末野・舞台住居跡出土資料）、大型のものに10～13cmの小型のものが混在するもの（羽尾）、小型のみのもの（舞台C-2・西谷ツ）、かえりの付く小型のもの（舞台C-1）がある。

第196・197図には、各窯跡の坏蓋の法量を示した。

各々の法量を比較すると、舞台住居跡出土資料が14～17cmと大型、羽尾窯が13～14cmを中心としてバラツキがあり、舞台・西谷ツ窯が10～12cmと小型である。

形態は大きく二つに分けられる。第1類は、末野窯、羽尾窯、舞台C-2号窯、平谷窯を中心とするもので、端部が直立あるいはやや内側に屈曲するものである。

ただし末野窯のものは厚く重量感があり、平谷窯、羽尾窯のものは薄くシャープである。末野窯では手持ちヘラ削りで仕上げられるものが認められる。第2類は舞台窯住居跡の資料を中心に末野窯にも少数が認められる。口縁部と体部の境に沈線や凌が見られ、端部が外反するものである。

羽尾窯では、ボタン状の鈕がつくものが含まれている。

坏身 坏身の法量は自明だが蓋と対応関係にあると思われるものの、羽尾窯跡では小型の蓋に対応する坏身は図示されていない。また根平窯では小型の坏身のみが出土している。西谷ツ窯では坏身は出土していない。舞台C-1号窯はいわゆる坏Gのみである。

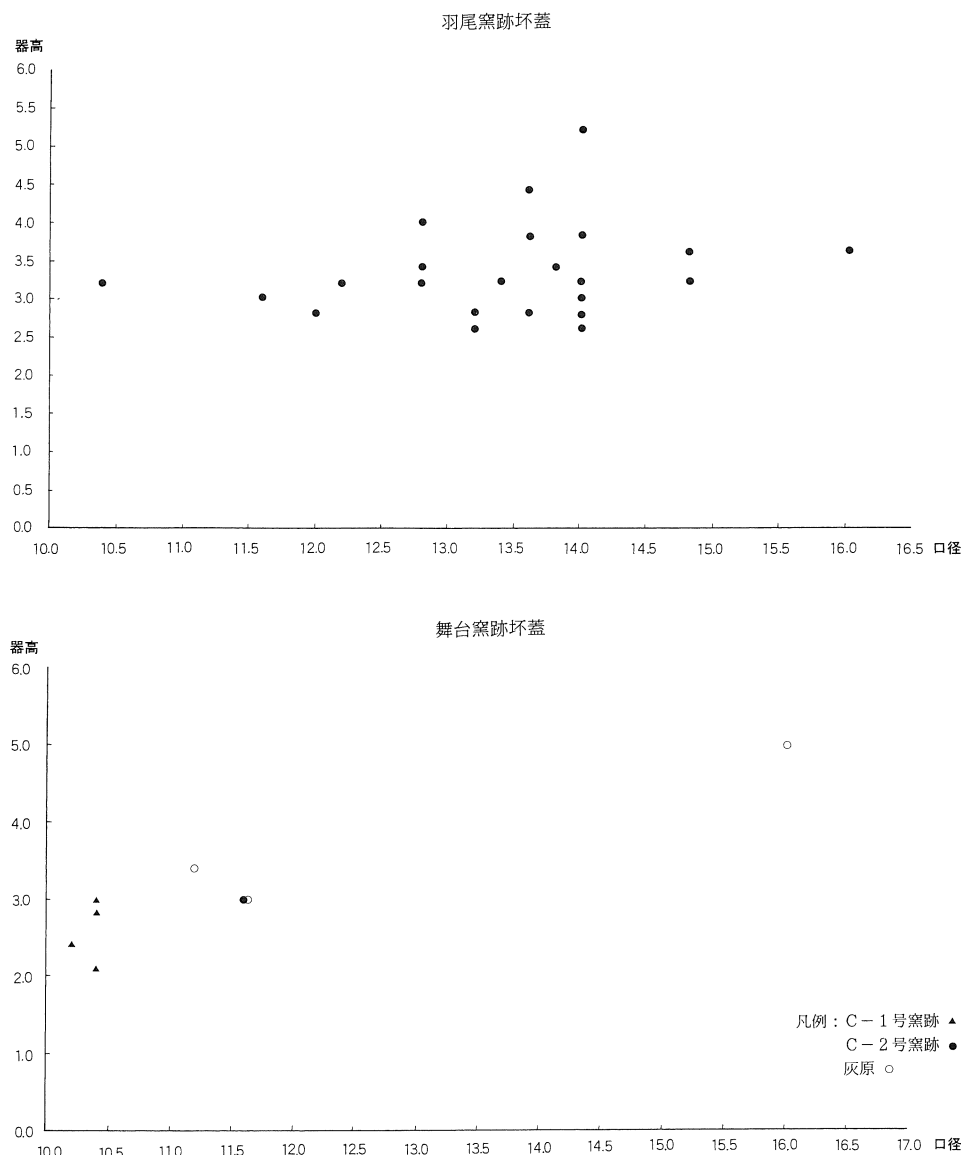
第198図には坏身の法量を示した。各々の法量を比較すると、舞台第1号住居跡が14.5～15.0cmを中心とする大型のもので占められる。羽尾窯も14.5～15.0cmを中心とするがバラツキがある。

形態は大きく3つに分けられる。第1類は末野窯・羽尾窯で見られ、口縁部が厚く、直立するものである。断面が三角形になるものが多い。第2類は内傾し、口縁が薄く仕上げられるもので、大きく反って端部が直立するものと直線的なものがある。内面の口縁部と体部の境に凹線や鋭い爪が入るものが見られる。末野窯灰原2・グリッド、羽尾、平谷、根平、舞台の各窯で見られ、仕上がり巧拙がある。第3類は舞台1号住居跡出土資料の偏平で受け部が極端に短いものである。中には口縁部を薄く内傾して仕上げるものがあり、第2類との近接した関係を知ることができる。いずれも内面のロクロナデ痕が強い。

高坏 末野窯、羽尾窯、根平窯、平谷窯で出土している。有蓋と無蓋がある。

長脚2段3方透かしのものがほとんどで、平谷窯で無透かし長脚2段、短脚のものが出土している。

第196図 羽尾・舞台窯杯蓋法量分布図



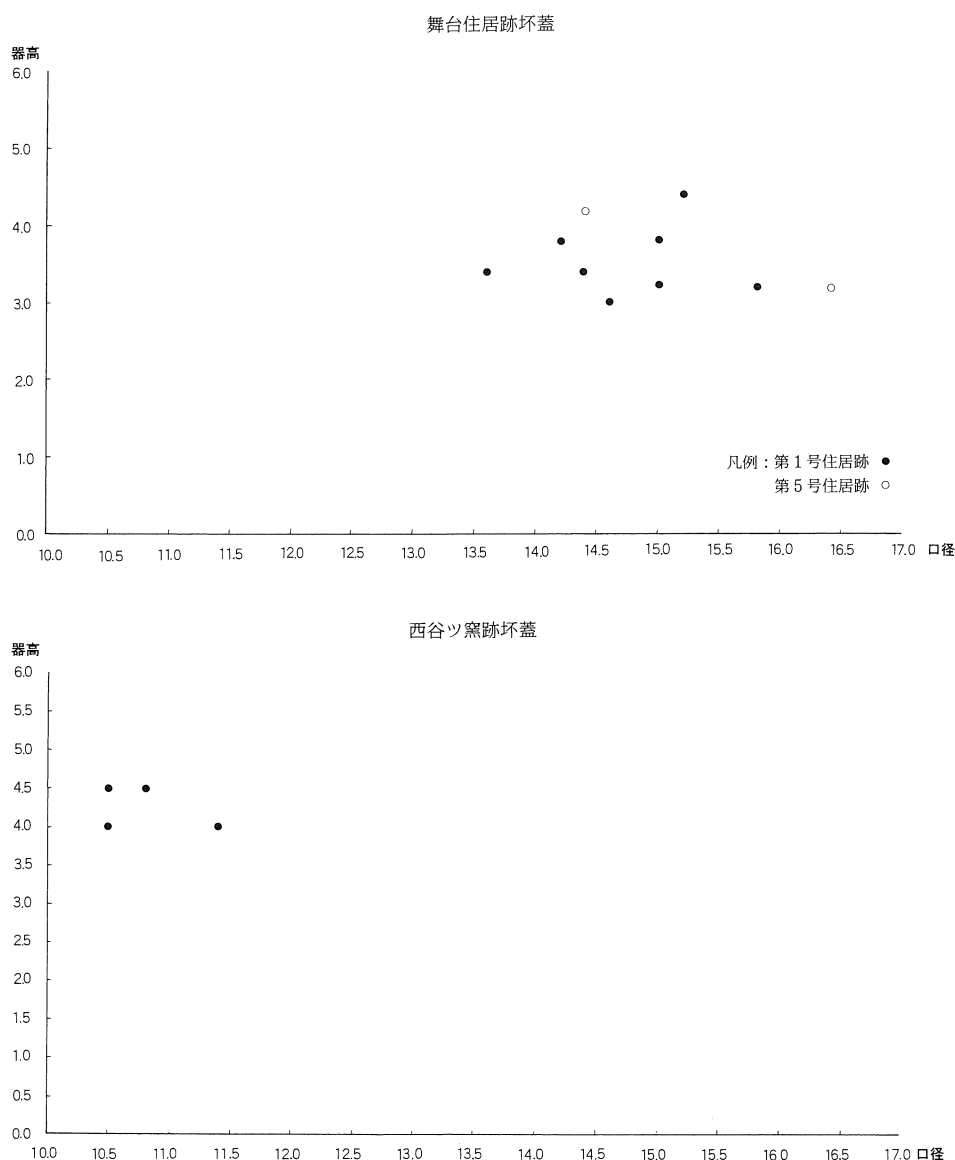
羽尾・平谷のものは内面に絞り目が有り、末野・舞台・根平のものには認められない。

また、舞台1号住居跡では、鈕が付く天井部にカキ目を巡らせる高杯の蓋と考えられるものが出土している。

小型短頸壺 末野3号窯、羽尾窯、根平窯で出土している。全形が知れるのは末野・根平のもので、いずれも口径10cm前後で根平窯の方がやや扁平である。末野窯ではグリッド出土のものに文様が施されるものや脚部が付くと考えられるものがある。末野窯では胴部中位に明瞭な段が付けられる。羽尾窯でも同様の位置に沈線が施されている。

甕 甕については口縁部を対象としたい。成形は末野遺跡同様である。端部の形態は、細かくは差異があるが、本書で報告したものと同様である。舞台第5号住居跡出土の甕は灰原3等と同様のA類である。羽尾窯ではD・E類が多い。区画数については破片が多く不明瞭だが、末野遺跡では3区画のものが多かったのに対して、舞台・羽尾・西谷ツでは4区画のものが図示されている。施文は波状文が主体で波状文C・Dが多い。斜沈線は、末野灰原2、羽尾、西谷ツで見られ、施文率は低いが共通するモチーフであったと考えられる。縦刷毛も末野灰原2、平谷、西谷ツで用いられている。舞台1号住居跡、末野灰原3では短い口縁のも

第197図 舞台住居跡・西谷ツ窯跡杯蓋法量分布図



のに波状文が施されている。

補強帯は舞台・末野のみに認められるが、羽尾の胴部破片にも幅広の剥離面が認められるものがあり、補強帯を持つ甕がある可能性がある。

(2) 各窯の前後関係と編年的位置

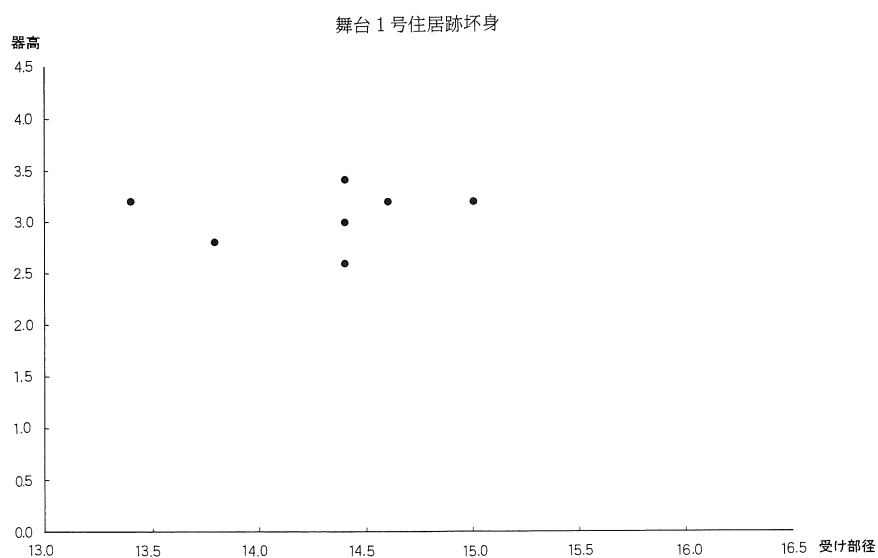
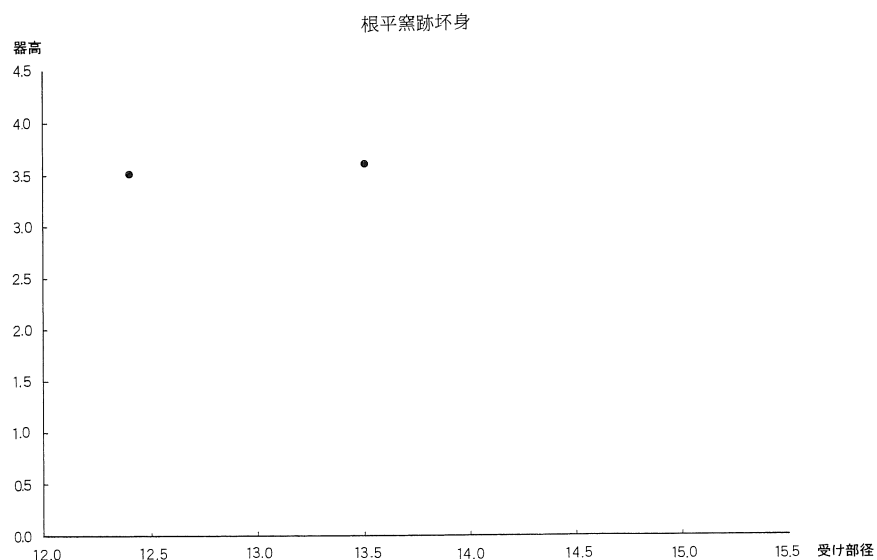
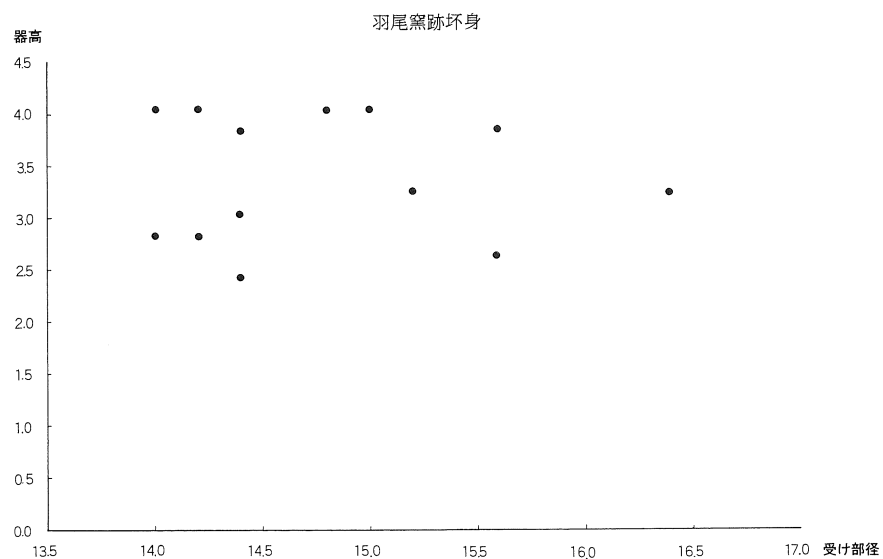
各窯の前後関係は、共通して出土している坏・甕を軸に考えてみたい。まず坏蓋だが2つの形態が存在するため直接の対比は困難である。坏身についても同様である。ここで、法量を見てみると、舞台住居跡出土資料、羽尾、末野第3号窯跡、灰原3、灰原2が近似した分布を示すことが分かる。同様に舞台、根平、西谷ツもまとまっている。微視的に見れば各々で異なる

が、それが指標にならないことは前に示した通りである。このそれぞれのまとまりを近接した時期と考え、検討を加える。

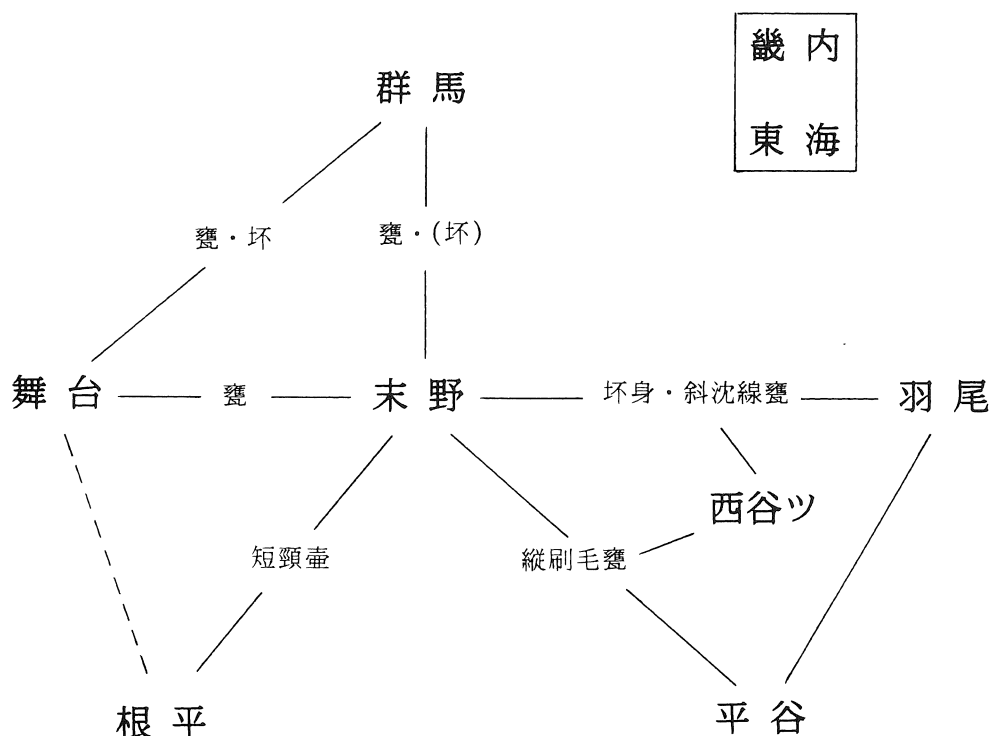
前者については、坏蓋第2類・坏身第3類の舞台住居跡出土資料をとりあえず切り離し、末野と羽尾の関係をまず見てみたい。

末野の坏の詳細については繰り返し述べたので、それを軸に羽尾の坏を見る。法量は羽尾の中心分布域が末野の灰原3・第3号窯跡よりやや小さく、バラツキがある。全体のプロポーションはほぼ同様である。口縁端部の形態は、第1類と第2類がある。法量の大小そのものは問題にならないが、大小のバラツキと端部

第198図 羽尾窯跡・根平窯跡・舞台住居跡杯身法量分布図



第199図 埼玉県内の窯跡関係図



形態第2類がある点を考慮すれば灰原2との共通性が窺える。しかし、その一方で灰原2に見られるほどの極端な偏平化が見られず、全体のプロポーションは灰原3・第3号窯跡と共通する。また、末野には見られないボタン状の鈕が見られる。

ここで甕に眼を転じてみると、前述のように羽尾窯では口縁D・E類が多く、斜沈線モチーフが認められ、灰原2との共通性がある。

まとめると、末野遺跡灰原3・第3号窯跡との共通性もあるが、灰原2との共通性が強い。窯体の複数回の改造が明らかなことから操業期間に幅があったとも考えられるが、捨場第3層からのまとまりをもった出土状況と、窯床のものと捨場のものに明瞭な差異が見られないことから、ある程度の一括性が認められると考えられ、末野遺跡灰原2に近い時期の操業を推定したい。平谷窯もほぼ羽尾窯と同様の様相である。破片資料が多く確実でない部分が多い。

次に、舞台住居跡出土資料との関係だが、坏蓋第2類については、末野遺跡灰原3のものの方が深めである。偏平化という点のみを取り上げれば、舞台住居跡

出土資料が新しい様相を示すことになる。しかし灰原3中には第2類が1点のみしか含まれておらず、この状況のみで両者を比較するのは難しい。法量の点からは、大きいもののみで構成され、灰原3・第3号窯跡との共通性が窺える。甕に眼を転じると、第5号住居跡出土資料は、口縁Aであり、灰原3との共通性がある。ここで舞台第1号住居跡から出土している高坏の蓋に着目すると、本書で報告した窯跡・灰原、羽尾の資料中には明瞭に高坏の蓋とできるものは見当たらず、舞台のみで生産されていることが分かる。末野窯跡群で確実に有蓋高坏の蓋とできるものは、中小前田2遺跡の小前田1号墳出土遺物のみである。報告書ではTK217とされているが、高坏に限れば、本書で報告した資料と比較した場合、蓋が深めで天井部と口縁部の境に沈線が巡らされる点、坏部の形態が丸く、口縁が長い点からそこまで下るかどうかは疑問で、灰原3・第3号窯跡よりやや溯るのではないかと考えられる。胴張りの石室、埴輪の出土からむしろこの高坏は、築造当初に近い時期のものではないだろうか。本書の資料中に同様の資料が見られないことも示唆的であ

る。ここでは、以上の点から末野窯における高坏の蓋の生産を、TK43段階と推定しておきたい。

舞台第1号住居跡出土資料の高坏の蓋も同様の時期の可能性はある。

舞台遺跡住居跡出土資料と末野遺跡を比較する材料は乏しいが、法量と甕、高坏の様相から、末野遺跡灰原3・第3号窯跡とはほぼ同時か、やや遡る時期を考えておきたい。

舞台窯、根平窯、西谷ツ窯については定点となる同様の末野遺跡の資料がない。陶邑のTK217に相似している。特に舞台窯では、所謂坏Hと坏Gが併焼された可能性がある。また、西谷ツ窯では前述のように甕の斜沈線、縦刷毛目という、末野遺跡灰原2・羽尾窯、平谷窯と共通するモチーフが見られ、継続した時期の可能性も考えられる。坏Hと坏Gが混交する時期のため、この少数の資料のみで前後関係は判断できない。前述の富田氏の編年でⅣ（古）段階とされた今井遺跡群G地点第2号住居跡出土例よりも、坏H、坏Gとも深く、それ以前と考えられる。ここでは、末野遺跡灰原2より後、今井遺跡G地点第2号住居跡出土資料よりも前ということで、7世紀第2四半期を中心とする操業を推定するに留めたい。

（3）須恵器製作技術の系譜

坏蓋の第1類については、形態そのものは坏蓋として一般的なものであり、これをもって系譜関係は云々できない。前述のように末野窯第3号窯、灰原3で見られる端部外面のタタキ工具による押さえが、陶邑の外縁部の製品に見られることから、その系譜が示唆されるのみである。また、外面の口縁部と体部の境に入る沈線は、7世紀では猿投窯や湖西窯の製品に見られるもので、羽尾窯の製品の大半はその点から言えば東海的である。

第2類については酒井清治氏が早くから群馬県を中心に関東地方全体で見られる特徴的なものであることを指摘し、「北関東型」須恵器を特徴づけるものとしている。（酒井1995）

また、坏蓋に見られる手持ちヘラケズリも同様に「北関東型」の特徴とされるものである。

坏身の3形態は第3類については不明確だが、1・2類については群馬県域にも見られ、現段階ではその系譜と理解するに留めたい。ただし第2類としたもので作りの良いものは東海や畿内との関係を窺わせるものがある。第3類については、直接類似するものは見出し難く、あえて例を求めれば東海地方に散見する程度である。一方、群馬県域でも綿貫観音山古墳（群馬県立歴史博物館1990）、菅ノ山窯などに受け部の短いものがあることからその流れを汲むものであろう。

小型短頸壺は、神奈川県横浜市熊ヶ谷東窯跡でも見られ、大谷徹氏は窯構造とも合わせて東海地方に系譜を求めている。（大谷1986）埼玉県内出土例は肩の張りが大きい。末野窯・羽尾窯の胴部の中位に沈線が施される点を重視すれば、東海的と言えるだろう。一方、より偏平な器形のものは菅ノ沢窯、藤岡市平井地区1号古墳（志村1993）等で見られる。菅ノ沢窯出土例には、胴部中位の沈線区画内に波状文が施されるものがあり、末野窯のグリッド出土例（166図84）と、文様施文という点では共通性がある。

甕は、補強帯甕の存在が群馬県域との関係を窺わせるが、いずれの窯跡とも口縁部が長い甕は同様の手法で口縁部と胴部を接着しており、補強帯はそれを装飾的に変化させたものであると考えられる。補強帯は特徴的であるが、技術的な側面からの必要によるものではない。補強帯を巡る問題は興味あるところだが、今回の資料中では少数のため別稿に譲りたい。むしろ、補強帯はないが同様の方法により接合している点を重視し、群馬県域との関係を考えたい。また、口縁端部の形態の内、C類は菅ノ沢窯にも認められ、群馬県域との関係が窺われる。

以上述べてきたように、埼玉県内の須恵器生産は、一元的に展開されたのではなく、畿内、東海、群馬の複数の系譜関係と、窯構築・須恵器製作の相互の技術的な共有関係があったことが想定される。（199図）

6. 今後の課題

末野遺跡の調査成果について、1～5まで検討を加えてきた。ここでは、残された課題を挙げ、まとめにかえたい。

まず末野窯跡内におけるF区第1～3号窯跡、各灰原の位置づけである。既にⅡでも触れたが、本書で報告した資料が現段階で確認されている末野遺跡の最も古い窯跡である。酒井清治氏は、上里町東猿見堂遺跡出土の5世紀末から6世紀初頭の器台、高坏を末野窯の製品としている。(酒井1989) 今後の調査によりより古い生産の様相が確認されれば、第1～3号窯跡・各灰原の技術的な流れも明らかになるであろう。また、本事業に伴い調査されたF区東側灰原では7世紀後半の大規模な灰原が検出され、現在整理中である。整理の結果を対照すれば時間的な相違と技術の流れが明らかになると考えられる。

F区の資料については、前述のように土師器との関係を明らかにすることで位置づけられると考えられる。2では富田、磯崎両氏の編年を用いたが、更に筆者自身で土師器の検討を行い、再度試みたいと考えている。

本書では埼玉県内の須恵器生産について素描してみたが、前述のようにF区西側の資料が、当時の須恵器生産の中でどのような位置を占めるのか、関東あるいは東日本にまで視野を広げて検討していきたい。

須恵器窯の調査では、常に工人集団の実態が話題になる。多くの場合、坏やへう記号を用いて行われるが、F区の資料については、難しいと考えられる。むしろ甕の口縁部形態や文様が手がかりとなると思われるが、本書では検討が及ばなかった。F区東側灰原との時間的關係も考慮しながら、可能性を探りたい。

次に供給と需要の問題がある。F区西側で生産された製品はどのように流通したのであろうか。埼玉県内の古墳時代各窯跡産須恵器の分布については酒井氏により簡潔にまとめられ、末野窯の製品は荒川以北の群馬寄りの地域に分布するとされている。(酒井1989) しかし第3号窯跡の製品が埼玉古墳群に供給されてい

ることが明らかになり、荒川を利用した流通が想定されるため、分布については再検討が必要と考えられる。これまで、群馬産とされていた製品を含めて再検討を進めたい。

また、田中広明氏による補強帯のある甕についての研究(田中1993)、内山敏行氏による栃木県域の7世紀代の須恵器の系譜に関する研究(内山1997)は、F区の資料と密接に関わる内容である。既に述べたようにF区における波状文は、2区画2段、3区画2段が主体で、補強帯は刷毛目調整のものとの対応関係がある。今後本書の成果と対照していきたい。

埴輪についても本書では検討を保留した。若松氏の見解とも合わせ、日田市の例も合わせて検討したい。

最後に末野窯の経営についての問題が残る。7世紀前半では周辺古墳群、箱石遺跡、谷津古墳群、藤田古墳群、樋ノ下遺跡、小前田古墳群、黒田古墳群の被葬者との関係が予想される。また埼玉古墳群との需給関係が明らかになったことで、何らかの関係を推定することも可能だろうが、現状では供給先の一つというだけで直接の経営母体とは考え難い。

坂野和信氏は、7世紀前半の末野窯を経営した渡来系氏族が、東国最古の寺院である滑川町寺谷廃寺の造営を行ったと推定している。(坂野1997)

現在のところ、7世紀前半の末野窯の経営に渡来系氏族関わった直接の証拠はない。寺谷廃寺の瓦窯である平谷窯については、至近の羽尾窯との関係が最も高いと考えられる。羽尾窯と末野窯が密接な関係にあることは5の検討からも明らかだが、両窯は舞台、根平、西谷ツの各窯とも関係があり、末野窯については群馬系統も考慮する必要があり、単系的な理解の難しさがある。また末野窯の周辺で古墳群の造営が継続している点、鐘撞堂山の東に広がる集落、そして7世紀第3四半期の馬騎の内廃寺の造営を整合的に説明する必要がある。坂野氏の推定は現状では可能性の段階にとどまるものである。

窯跡・集落・古墳・寺院の動向を踏まえて、末野窯

の経営について考察したいと考えている。

末野遺跡F区の調査は多くの知見をもたらしたが、筆者の力量不足もあり、十分な検討を尽くせなかった。

ここであげた課題の他にも多様な分析が可能と思われる。再考を期し、ひとまず稿を閉じたい。

註

1. 酒井清治氏ご教示による。
2. 1997年に行われた「古代の土器研究会」で大きな話題を集めたのは記憶に新しい。具体的に中心となったのは、陶邑のTK217がこれまで所謂坏Hと坏G、坏Bを含むことから新旧に分離されとされていたものを、地方窯の様相から伴出する実態を示した一括資料と捉え直し、年代を7世紀後半に下げようという見解である。飛鳥編年、あるいはTK209等の陶邑の年代全体に関わる問題だが、従来の新旧分離案を支持する研究者も多く、一定の結論は出ていない。
3. 担当者の若松良一氏の呼称、以下も同様である。
4. 1997年9月11日付け大分合同新聞、9月12日付け西日本新新聞による。大谷徹氏からご教示を受けた。
5. 送風溝については、従来雨水等を避けるための排水溝とされていたが、福島正実氏の指摘を受けた望月精司氏の研究（望月1993）により、奥壁を持たない火の引きの悪い構造の窯の引きを良くするための施設であるとされている。本稿では、その機能を重視し「送風溝」という呼称を用いた。
6. 古墳の石室の構築方法については、岩田明広氏にご教示頂いた。

引用・参考文献

- 赤熊 浩一 1996 「寄居町末野遺跡の調査」『第29回遺跡発掘調査報告会発表要旨』P16・17 埼玉考古学会・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立博物館・埼玉県立埋蔵文化財センター
- 井川 達雄・宮下万喜子ほか 1985 『三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団
- 伊崎 俊秋 1989 『稲元日焼原』宗像市文化財調査報告書第22集 宗像市教育委員会
- 石塚 三夫 1994 『中小前田1遺跡』寄居町遺跡調査会報告第1集 寄居町遺跡調査会
- 石塚 三夫・田代 康宏 1994 『葉師台遺跡・大正寺南遺跡』寄居町遺跡調査会報告第2集 寄居町遺跡調査会
- 石塚 三夫 1995 『町内遺跡2』寄居町文化財調査報告第13集 寄居町教育委員会
- 石塚 三夫 1996 『用土前峯遺跡』（第2次・第3次）寄居町遺跡調査会報告第8集 寄居町遺跡調査会
- 石塚 三夫 1996 『末野元宿遺跡』寄居町遺跡調査会報告第9集 寄居町遺跡調査会
- 石塚 三夫 1996 『中小前田1遺跡（第2次）』寄居町遺跡調査会報告第11集 寄居町遺跡調査会
- 石塚 三夫 1996 『用土北沢遺跡』寄居町文化財調査報告第16集 寄居町教育委員会
- 石塚 三夫 1997 『中小前田2遺跡（第4次）（第5次）・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集 寄居町遺跡調査会
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯崎 一 1997 「古墳時代の土器編年と集落について」『今井川越田遺跡Ⅲ』P327～348 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上 尚明・石塚 三夫 1995 『東伴場地遺跡（第5次）』寄居町遺跡調査会報告第3集 寄居町遺跡調査会
- 井上 尚明・石塚 三夫 1995 『普光寺東遺跡（第2・3次）』寄居町遺跡調査会報告第4集 寄居町遺跡調査会
- 井上 尚明 1996 『むじな塚遺跡（第4次調査）』寄居町遺跡調査会報告第10集 寄居町遺跡調査会
- 井上 尚明 1997 『露梨子遺跡』寄居町遺跡調査会報告第12集 寄居町遺跡調査会
- 井上 尚明 1997 『灰田原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第13集 寄居町遺跡調査会
- 井上 肇他 1978 『舞台（資料編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集 埼玉県教育委員会
- 井上 肇・水村 孝行ほか 1979 『舞台（本文編）』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集 埼玉県教育委員会
- 井上 肇・石塚 三夫 1994 『町内遺跡1』寄居町文化財調査報告第12集 寄居町教育委員会
- 井上 肇・井上 尚明 1996 『甘粕原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第7集 寄居町遺跡調査会
- 今井 宏 1982 『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 今関 久夫 1990 『むじな塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第8集 寄居町遺跡調査会
- 岩田 明広 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 内山 敏行 1997 「律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県」『東国の須恵器』P87～101 古代生産史研究会
- 梅澤 重昭 1990 「観音山古墳の発掘調査」『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』P58～80群馬県立歴史博物館
- 江浦 洋 1995 「第1章 陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡 分析・考察編』P1～36 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 大谷 徹ほか 1986 『奈良地区遺跡群発掘調査報告Ⅳ 熊ヶ谷東遺跡』奈良地区遺跡調査団
- 小沢 国平・柳田 敏司 1960 『古墳調査報告書』大里郡・熊谷市・深谷市・古墳調査 埼玉県教育委員会
- 関東古瓦研究会 1997 『関東の初期寺院』
- 群馬県 1986 『群馬県史 資料編2』
- 国際古代史シンポジウム実行委員会 1996 『飛鳥・白鳳時代の諸問題Ⅰ』
- 古代生産史研究会 1997 『東国の須恵器』
- 古代の土器研究会 1997 『7世紀の土器 古代の土器5－1（近畿東部・東海編）』
- 古代の土器研究会 1997 『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東5 7世紀の土器－』
- 駒宮 史朗・大和 修・今井 宏 1982 『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・猪久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994 『年報14』

- 埼玉県立歴史資料館 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井 清治 1981 「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館第13号』P 1～24 史館同人
- 酒井 清治 1984 『台耕地（Ⅱ）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 酒井 清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開－埼玉を中心として－」『研究紀要第11号』P 1～26 埼玉県立歴史資料館
- 酒井 清治 1991 「関東」『古墳時代の研究第6巻 土師器と須恵器』P 207～216 雄山閣出版
- 酒井 清治・伊藤 博幸 1995 『須恵器集成図録第四巻 東日本編Ⅱ』 雄山閣出版
- 酒井 清治 1997 「古墳時代の須恵器－須恵器研究の視点－」『古墳出土の須恵器』P 40・41 高崎市観音塚考古資料館
- 埼玉県 1987 『荒川 自然』荒川総合調査報告書1
- 坂戸市 1992 『坂戸市史・古代史料編』
- 塩野 博・小久保 徹 1975 『黒田古墳群』埼玉県花園村黒田古墳群発掘調査会
- 志村 哲 1993 『平井地区1号古墳』群馬県藤岡市教育委員会
- 高橋 一夫 1977 「比企郡鳩山村の須恵器」『埼玉考古第16号』P 11～14 埼玉考古学会
- 高橋 一夫 1980 『羽尾窯跡発掘調査報告書』滑川村教育委員会
- 高橋 一夫 1982 「寄居町馬騎の内蔵寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』P 102～110 埼玉県県史編さん室
- 高橋 康男 1988 『大和田遺跡』（財）市原市文化財センター調査報告書第25集 （財）市原市文化財センター
- 谷井 彪ほか 1974 『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 瀧瀬 芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高木 義和 1981 『稲荷窪遺跡』寄居町文化財調査報告第5集 寄居町教育委員会
- 田口 一郎他 1979 『正観寺遺跡群（Ⅰ）』高崎市文化財調査報告書第11集 高崎市教育委員会
- 田辺 昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺 昭三 1983 『須恵器大成』 角川書店
- 田中 広明 1992 「補強帯のある大甕の生産と流通」『埼玉考古第30号』P 291～317 埼玉考古学会
- 鶴間 正昭 1993 「多摩ニュータウンNo.342遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 平成3年度第5分冊』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第15集 東京都埋蔵文化財センター
- 富田 和夫・赤熊 浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村 倉司 1980 「一本松古墳」『趣藝神社前遺跡・一本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告第39集 埼玉県遺跡調査会
- 中村 浩 1980 『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29輯 （財）大阪文化財センター
- 中村 浩 1991 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房
- 中村 浩編 1995 『須恵器集成図録第一巻 近畿編Ⅰ』 雄山閣出版
- 中村 浩・藤原 学編 1996 『須恵器集成図録第二巻 近畿編Ⅱ』 雄山閣出版
- 中沢 良一・丸山 良一 1996 『猪俣南古墳群・丸山遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県児玉郡美里町教育委員会
- 日本の地質『関東地方』編集委員会 1986 『日本の地質3 関東地方』 共立出版株式会社
- 野部 徳秋・高木 義和 1977 『末野窯址（花園支群）発掘調査』文化財報告第2集 寄居町教育委員会
- 野上 丈助 1980 『陶邑Ⅴ』大阪府文化財調査報告書第33輯 大阪府教育委員会
- 畑中 英二 1995 「第5章まとめ 1. 須恵器坏Hを中心とした出土遺物の時間軸上の位置」『大通寺古墳群（本文編）』P 159～177 滋賀県教育委員会 （財）滋賀県文化財保護協会
- 花塚 信雄 1985 「叩き目文の原体同定」『辰口町湯屋古窯跡』P 107～115 石川県辰口町教育委員会
- 坂野 和信・富田 和夫 1996 「飛鳥時代の関東と畿内」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』P 91～108 国際古代史シンポジウム実行委員会
- 坂野 和信 1997 「日本仏教導入期の特質と東国社会」『埼玉考古第33号』P 105～160 埼玉考古学会

- 昼間 孝志・宮 昌之・藤原 高志・木戸 春夫・赤熊 浩一・高崎 光司 1991 『北武蔵における古瓦の基礎的研究 I－Ⅳ』
- 昼間 孝志 1994 『桜沢窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第143集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 菱田 哲郎 1996 『須恵器の系譜』歴史発掘10 講談社
- 藤原 学・鍋島 敏也 1974 『千里古窯跡群』
- 藤原 高志 1982 「平谷窯跡」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』P 69～76埼玉県史編さん室
- 福島 正美 1985 「那谷金比羅山窯跡群」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』P 58～65 石川県立埋蔵文化財センター
- 福永 伸哉・北条 芳隆 1991 『桜井谷窯跡群 2－23号窯跡』大阪大学桜井谷窯跡群調査団
- 古谷 道生 1994 『穴窯 築窯と焼成』理工学社
- 舟山 良一・松本 敏三・池田 榮史(編) 1996 『須恵器集成図録第五巻 西日本編』雄山閣出版
- 堀口 萬吉 1986 「埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史別編 3 自然』P 7～80 埼玉県
- 水村 孝行 1980 『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
- 望月 精司・宮下 幸夫 1990 『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』石川県小松市教育委員会
- 望月 精司 1993 「須恵器窯構造から見た 7 世紀の画期」『北陸古代土器研究第 3 号』P 50～65 北陸古代土器研究会
- 寄 居 町 1984 『寄居町史』寄居町教育委員会
- 吉田章一郎 1984 「大里郡寄居町末野の窯址調査」『考古学雑誌 第40巻 1 号』P 35～47 日本考古学会
- 若松 良一 1989 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第 7 集 埼玉県教育委員会